



'95春日井市民第九演奏会

とき 1995.12.10 SUN 午後3時開演

春日井市民会館

主催 春日井市、春日井市教育委員会、'95春日井市民第九演奏会実行委員会

共催 春日井市交響楽団、春日井第九合唱団

後援 中部大学、中部大学女子短期大学、中日新聞本社

ごあいさつ

Greetings



春日井市長 鵜飼 一郎

年末のひととき、今年も皆さまとともに「第九」の調べを鑑賞できることを、大変うれしく思います。

音楽史上の傑作「第九」が春日井市で演奏されるのは、まだ3回目ではありますが、もうすっかり私たちの心に溶けこんでいます。それは、合唱団員や交響楽団員、さらには聴衆として、この演奏会に集う市民の皆さまの音楽に対する情熱が、大きな結晶となっているからにはなりません。魅力ある市民文化の創造をまちづくりの一つの柱としているわが市にとりましては、誠に心強く喜ばしいことあります。

今日にいたるまでの、春日井市交響楽団と春日井第九合唱団の皆さんを始めとする、関係の皆さんの大なる努力と熱意に心から敬意を表します。

物の豊かさから心の豊かさへと、人々の価値観が変化してきた昨今、生の音楽とりわけ名曲に直接ふれ、雄大な演奏に感動を覚えることは、きっと豊かな心を育むことになるでしょう。

阪神・淡路大震災で幕を明け、とかく暗い話題の多かった'95年ではありましたが、皆さんとともに声高らかに歓喜の歌を歌いながら、希望に満ちた新年を迎えるではありませんか。

それでは、ホセ・コントレーラスさんを指揮者にお迎えし、春日井市民による手づくりの第九演奏会をじっくりとお楽しみください。

the Mayor of Kasugai/Ichiro Ukai

I am very happy to have been able to close these past years together with you with an evening of appreciation of Beethoven's Ninth Symphony.

This year is but the third opportunity to enjoy here in Kasugai, the performance of one of the great masterpieces of all time, "the Ninth Symphony". Each performance has been a memorable and moving experience. Thanks to Kasugai Chorus and the Kasugai Symphony Orchestra the people of Kasugai's passion for music has burned and crystallized. We believe this event is a valuable contribution to the development of a creative and attractive Kasugai Culture. I have the greatest respect for all the members of the Kasugai Symphony Orchestra and the Ninth Annual Kasugai Chorus Group, as well as for all of you who have contributed to the success of this annual event.

Today we live in an age of changing values that I think is moving from that of the material to that of the spirit. I can't think of a better way to enhance the development of the spirit than to listen to the living sound of a celebrated composition and to forever cherish the memory of a moving performance.

Beginning with the Hanshin/Awaji Earthquake, this past year has been one blessed with little good news. But may I suggest that we, on the wings of the voices of our guests welcome the new year in a spirit of hope and good will.

Let us now welcome our guest conductor, Jose Contreras. I hope that everyone will enjoy Kasugai's own Ninth Annual Symphonic Concert.



'95春日井市民第九演奏会実行委員会会長

中部大学長 山田 和夫

第九演奏会によることをおいでくださいました。

本年は、ニューヨークから指揮者のホセ・コントレーラスさんをお招きしました。そして、ソリストにはクララ・ミラーさん、ジョイス・カンパーナさん、カール・タナーさん、マーク・ワトソンさんといった、ニューヨークを中心に活躍中の素晴らしい歌手のみなさんもおいで下さいました。

心から歓迎いたします。

このように海外から指揮者とソリストを単独で招聘することは、アマチュア主体の第九演奏会としては、勇気ある試みと自負しております。

春日井市の第九演奏会は、常に世界に開かれた春日井の窓であり、国際親善実現の舞台でもあります。そして、すべての市民のみなさまの心を音楽で結ぶ神々の火花であります。

この試みを可能にしたのは、私たちの春日井市交響楽団や第九合唱団がたくましく成長を遂げたからだけでなく、春日井市の積極的なご援助と市民のみなさまのご支援あってのことです。ここに深く感謝いたしますと共に、今後ともなお一層のご援助・ご支援をお願いいたします。

Chairman of the executive Committee/
Kazuo Yamada

Thank you for coming to the Ninth Annual Kasugai Symphonic concert. This year we have been fortunate enough to be visited by our guest conductor from New York, Jose Contreras, accompanied by an accomplished group of soloists, Clara Miller, Joyce Campana, Carl Turner, and Mark Watson. I'd like to thank you from the bottom of my heart, and I would like to say, "Welcome to Kasugai".

It no doubt took some courage for an amateur production like the Kasugai Symphonic Committee to invite performers of the stature that will be on stage today. I hope their participation in the Ninth Kasugai Symphonic Concert will help this event serve as a window to the world and as an opportunity to promote international friendship and good will. Furthermore, I believe that this event can bring the people of Kasugai together through the spirit of music.

This day was made possible not only by the growth and hard work of the Kasugai Symphony Orchestra and the Kasugai Chorus, but by the generous support of the City of Kasugai and its people. I would again like to thank everyone for their hard work and cooperation and to ask for everyone's continued support in the future. Thank you very much.

(Translated by Beni Mayjer : Chubu university women's college teacher)

プログラム

Program

ルートヴィヒ・ファン・ベートーヴェン作曲
LUDWIG VAN BEETHOVEN(1770-1827)

交響曲第9番 二短調 作品125 「合唱つき」 Symphony No.9 in d-minor op.125 "Choral"

第1楽章 1 mov. アレグロ マ ノントロッポ, ウン ポコ マエストーネ
Allegro ma non troppo, un poco maestoso

第2楽章 2 mov. モルト ヴィヴィアーチェ
Molto vivace

第3楽章 3 mov. アダージョ モルト エ カンタービレ - アンダンテ モデラート - アダージョ
Adagio molt e cantabile - Andante Moderato - Adagio

第4楽章 4 mov. フィナーレ, プレスト - アレグロ アッサイ
Finale, Presto - Allegro assai

指揮者
Conductor

ホセ・コントレーラス
José Contreras

ソプラノ Soprano
クララ・ミラー
Clara Miller

アルト Alto
ジョイス・カンパーナ
Joyce Campana

テノール Tenor
カール・タナー
Carl Tanner

バス Bass
マーク・ワトソン
Mark Watson

音楽監督 都築正道
Music director

合唱指揮 吉川 朗
Chorus conductor

管弦楽 春日井市交響楽団
KASUGAI CITY PHILHARMONIC ORCHESTRA

合唱 春日井第九合唱団
KASUGAI 9TH SYMPHONY CHORAS

プロフィール

Profile



指揮者
Conductor
ホセ・コントレラス
José Contreras



ソプラノ Soprano
クララ・ミラー
Clara Miller

イギリスのオックスフォード大学の修士課程を修了。文学修士の学位を持つ文学者でもあり、音楽評論家としても活躍中。奨学金を得てロンドンのローヤル・アカデミー音楽院で声楽を学ぶ。ウェルシュ国立オペラの歌手としてヨーロッパやNYや東京公演に同行。グラインドボーン音楽祭やコヴェントガーデンの王立オペラハウスなどにも出演。多くのオペラの主役を歌っている。1990年以降は、ロンドン・ミュージカルにも出演。映画の舞台やハリソン・フォード出演の「最後の禁断の王国」でナレーション役を務める。また、この映画のドキュメントを出版。アメリカの写真家グレン・マーロウ氏と結婚。現在NYに住む。オーディションでは、モーツアルト作曲の歌劇『コシ・ファン・トゥッティ』より名曲「私のみさおは岩よりもかたく」を、強い、激しい声で、若い女の潔癖さを歌い、モーツアルトのオペラのアリアと役柄に対する理解力の確かさを示した。



アルト Alto
ジョイス・カンパーナ
Joyce Campana

深い声と個性的なキャラクターの持ち主で、オーディションでは、ドニゼッティ作曲の歌劇『ラ・ファヴォリータ』より難曲の「いとしのフェルナンド」を完璧に歌った。メトロポリタン・オペラやNYシティ・オペラで歌い、ラジオに出演。セントラル・シティ・オペラに招待されて、「三文オペラ」のジェニーや「アルジェのイタリア女」のイザベラを歌い好評を博す。コンサートでもNYフィルやハートフォード・シンフォニーと共に、「さすらう若者の歌」や「ペールギュント」を歌う。



テノール Tenor
カール・タナー
Carl Tanner

オーディションでは、ブッチーニ作曲の歌劇『トスカ』より「妙なる調和」を、豊かな声量と甘い声のベルカントで優れて魅力的に歌った。コナチカット・オペラで「ボエーム」の主役のロドルフォを歌い、また、オペラ・ロアノウクで「蝶々夫人」のピンカートンを歌って大成功を納めた。ニューヨーク・シティ・オペラやサンタ・フェ・オペラやワシントン・シティ・オペラなどでも主役を歌い活躍を続けている。NYのナショナル・シンフォニー・オーケストラやカーネギー・ホールのコンサートでもソロや歌曲を歌っている。多くの賞も獲っている。



バス Bass
マーク・ワトソン
Mark Watson

アメリカのデトロイトで生まれる。カーネギー・ホールやメトロポリタン・オペラやバルティモア・オペラやミシガン・オペラ劇場やマンハッタンコンサート・オペラなどで歌った経験を持っている。ジュリアードのアメリカ・オペラ・センターで学んだ後、イタリアやベルギーやイスラエルで学ぶ。多くのコンクールで賞を得ている。現在も、ミシガン・オペラ劇場の「メリーワード」などに出演し好評を得ている。



音楽監督
都築 正道
つづき まさみち
名古屋市生まれ、名古屋大学文学部美学科卒。文博。指揮を横井園生氏に、作曲を熊谷賢一氏に、声楽を故山田昌弘氏に師事。朝日新聞音楽評担当。春日井市をはじめ、イタリアやフランスの国際コンクールの審査員を務める。現在、中部大学女子短期大学教授。春日井市交響楽団音楽監督。



愛知教育大学音楽科卒業。同大学院(作曲)修了。あけぼの合唱団、豊田ひまわりコーラス、大高北PTAコーラスを始め、名古屋オペラ協会、愛知県文化振興事業団などのオペラの正指揮、副指揮を務める。名古屋シティ管弦楽団の合唱団指導にあたっている。
名古屋芸術大学音楽部オペラ研究室実技補助員。

ピアノ伴奏(合唱団)
竹内 理恵
たけうち りえ

合唱指揮
吉川 朗
よしかわ あきら
名古屋芸術大学音楽部オペラ研究室実技補助員。



管弦楽 春日井市交響楽団

平成2年11月、春日井市の市民アマチュアオーケストラとして設立。以来、創立記念演奏会(平成3年1月)・第1回定期演奏会(平成4年1月)・第2回定期演奏会(平成5年1月)など毎年自主演奏会を開催している。平成5年12月、春日井市制50周年記念『第九演奏会』(指揮:石丸 寛)には128名の特別編成の大オーケストラで参加した。平成6年7月の第3回定期演奏会と平成7年7月の第4回定期演奏会は客演の竹本泰蔵氏の指揮により好評を得た。定期演奏会の他、演奏旅行、音楽教室や市役所でのコンサートなど活動に演奏活動を行っている。愛称『カボ』は英字名称【KASUGAI CITY PHILHARMONIC ORCHESTRA】の頭文字をとったものである。



合唱 春日井第九合唱団

春日井市制50周年記念『第九演奏会』に出演した合唱団員を中心に結成された混声合唱団。団員数は200名。吉川朗先生の指導で、改めて、昨年につづいて今年もベートーヴェンの「第九」に挑戦する。カボ同様春日井市民に愛される音楽活動を目指している。



管弦楽練習指揮
高橋 直史
たかはし なおし
1973年生まれ、幼少よりピアノを始め数々のコンクール、オーディションに入賞。1993年東京芸術大学指揮科入学現在に至る。管、弦、打の様々な楽器、又声楽、器楽の伴奏など多方面で研鑽を積む一方、指揮ではシンフォニー、オペラどちらの分野でも意欲的な活動を見せる期待の新人である。

今までに遠藤雅古氏、指揮科特別講座においてクレリー・ゲルギエフ、若杉弘、岩城宏之の各氏に指導を受ける。現在、飯森範親氏の練習指揮者。

曲目解説

言わねばならぬこと

ベートーヴェンからのメッセージ

音楽監督 都築正道

異端の交響曲

ベートーヴェンの《第九交響曲》は、終楽章に4人のソリストと合唱が入った異端の交響曲です。「なぜ交響曲の終楽章に声楽を加えたのか」といえば、この《第9番》が彼の最後の交響曲であり、その終楽章は、彼の一連の交響曲の最終楽章でもあること大いに関係があると思われます。音楽史を少しのぞいただけでも、最後の交響曲の最後の楽章が（結果的にそうなったとしても）その作曲家の従来の交響曲の構成とは全く違った異質なものになっている例は意外に多いです。ブラームスの《第4番》の終楽章（パッサカラ）、ブルックナーの《第9番》の終楽章（は、完成されなかったので《テ・デウム》）、チャイコフスキイの《悲愴》の終楽章（アタージョ・ラメントーソ）、マーラーの《第9番》の終楽章（アダージョ＝フィナーレ）と並べてくれれば、単なる偶然であるとしても、少々気になるところです。無意識であっても、交響曲の絶筆となることを予感した作曲家が、その最後の作品の最後の楽章だけ、極めて前例のない破格なものに仕上げたことは、私たちに何か特別な、例えば、フロイト的な感慨をもたらします。それは、ひょっとすると、後世の私たちに向かれた作曲者からの直接の「遺言」（マニフェスト）なのではなかろうか——と思えるのです。

もっと心楽しく喜びにみちた調べを歌おう

特に、このベートーヴェンの《第9番》に終楽章こそ、正にベートーヴェンから私たちへ届けられた「メッセージ」であるといつていいでしょう。例えば、その良い例として、終楽章の長い序奏のあと、テキストとして用いられたシラーの詩が歌いだされる前に、バリトン・ソロがまるで宣言文を読むように朗唱する箇所が挙げられます。「おおわが友人たちよ、このような調べではなく、もっと心楽しく喜びにみちた調べを歌おうではないか」と歌うこの冒頭での掛けは、シラーの詩を始める前にベートーヴェン自身が書き記した序説です。この個人的な発言は、終楽章がベートーヴェンのマニフェスト（宣言文）であることをはっきりと現わしているといえましょう。

シラーの『歓喜の歌』とベートーヴェン

ベートーヴェンが最後の交響曲の最後の楽章にテキストとして用いたのは、8節からなるシラーの詩『歓喜に寄せる頌歌（しょうか）』『Ode an die Freude』なのですが、その中から人類愛を力強く賛えた語句を自由に抜粋して再構成したものでした。しかし、ベートーヴェンは、この《第9交響曲》の完成に先立つ31年も前に、一度、シラーのこの詩に作曲をしようと試みたことがありました。1792年（22歳）、その時彼はボン大学の聴講生でした。シラーの詩の初版時の9節全部に歌を付け、通作歌曲として独立した合唱曲にしようと考えていたようです。しかし、『命名祝日』序曲（作品115）にこの合唱曲の流用を思っていたものの、結局、『歓喜に寄せる頌歌』の音楽化の企て

は実現しませんでした。その後も長い間、ベートーヴェンがこだわり続けてきたシラーの詩は、やっとのことで最後の交響曲に生を受けることとなります。でも、それは、時代をはるかに先取りしていたために、すべての人から理解され祝福された誕生ではありませんでした。

当時の人々にとってこの詩は、大衆になじみ深い宗教詩でも聖句でも古典詩でもない、彼らと同時代の詩人フリードリッヒ・シラー（Friedrich von Schiller, 1759-1805）の啓蒙思想やフリーメイソンの信念を語る現代詩がありました。時の政権メッテルニヒの政策に反対する「危険なほどの民主主義思想が、宗教的な歌詞の中に入り込んだのである」（フリーダ・ナイト）といわれるほど、本質的には、政治的な主張を歌ったプロパガンダな詩なのです。このことが、当時のウィーンの人々に、この曲を「難解」なものと感じさせた原因のひとつでもあります。しかし、それ以上に、彼らが強い戸惑いを覚えたのは、絶対音楽である交響曲に声楽を加えたベートーヴェンの前衛的な音楽技法でした。ベートーヴェン自身も、「この試みは単なる暴挙にすぎず、完全に間違いであって、いつか純粹音楽の終楽章を書こう」と弟子ツェルニーに語ったということです。

歓喜は神々の火花である

しかし、ベートーヴェンが、この暴挙をどれほど真剣に反省していたかは疑問です。結局、この改作案は実現されずに終りました。私は、このエピソードにもかかわらず、「ベートーヴェンは、最後の交響曲が理解されないままに終わることを恐れず、あくまでも言葉によるメッセージの必要性を主張し、最後までその主張を放棄しなかったのだ」と思います。この曲には何か、人間として、作曲家として、社会に対して果さねばならぬベートーヴェンの「義務の念」といったものが強く感じられるからです。ここで私たちは、次の挿話を思い出します。ある人が、シェーンベルクに尋ねました、「どういう訳でベートーヴェンは、《第9交響曲》を乱雑だといわれながらも、書きつけたのですか？」彼は言いました、「答は一つしか知らない。言わねばならぬことがあったからだ。」

正にその通りで、彼には言わねばならぬことがあったのです。冒頭の1節「歓喜は神々の火花である」がそれです。ここでの「歓喜」は、私たちが日ごろ思っているような、食べたり飲んだり遊んだりの「快樂」や「欲望」の結果としての「歓喜」のことではありません。詩をよく読んで見ますと、「欲望はウジ虫にくれてやった」という一節もあり、個人的な快樂や欲望をはっきり否定しています。シラーの言う「歓喜」とは、個人を離れて理想的な人類愛をめざす、極めて精神的な満足感や充実感を言うのでしょうか。一人の友と眞の友になった人、一人の優しい女性を勝ち得た人、その人の心が自分のものだと言える人——こう言った人々こそ「歓喜」を知った人たちです。この歓びの感情を知った人たちだけが、兄弟となるのです。鉄と鉄がガスや電気のバーナーで何千度にも熱せられると、どろどろと溶けだしてお互いがくっ付くように、普段は別々の興味や考え方をもつ人たちでも、「子どもが生まれた」「オリンピックで日本人が優勝した」「ノーベル文学賞をもらった」となるとみんなが肩を抱き合ったりします。なにか共通の喜びがあれば、それが火

花となってすべての人の心を溶かし、一つに結びつけるのです。すなわち、「歓喜」は、「共通体験から生まれる感動」のことだといつていいでしょう。本日のみなさまのように、年末に家族そろって『第九』を聴くのも、この「歓喜」を求めてのことだと思われます。

理想的な人類愛

さらに、「歓喜は、また、樂園からやってきた乙女だ。神々の火花によって、私たちが火のように酔うならば、そこで初めて歓喜の聖域に踏み込むことができるのだ」とシラーは歌います。「人類の心は、もともと一つであったのだ。それが、戦争や飢餓や恐慌や独裁といった時の流れで、いままでの友が新たな敵となり、仲間が仲間を殺したり嘲ったり軽蔑したりするようになってしまったのだ」と。それほど激しく憎み合い、もう修復が効かなくなつた関係であっても、「歓喜はまた再び私たちの心を結び合わせてくれる。これを魔法の力と言わずして何といおうか！」とシラーは人類の心の底に流れる歓喜の力を力説しているのです。もちろん、これはベートーヴェンのマニフェストでもあります。すなわち、個人を離れて理想的な人類愛をめざす、極めて精神的な満足感や充実感のことです。

さらに、彼はいいます——「歓喜とはなにか。それはこの世界で幸せを見つけたことをいうのだ。例えば、眞の友を得た人、優しい女性と結婚した人、だれかに確かに愛されていると感じる人こそ、歓喜を知る人なのだ。もしもあなたが、このどれも知らないのならば、私たちの仲間にすることはできない。涙を流して去っていきなさい」と。

さあ、私たちは、このシラーとベートーヴェンのメッセージに対してどう答えればいいのでしょうか。それを、本日の演奏を聞きながら、一緒に考えてみることにいたします。

作曲年代 1817年-1824年2月

初演 1824年5月7日 ケルントナートール劇場

献呈 プロシヤ王フリードリヒ・ヴィルヘルム3世

出版 1826年6月 マインツ市ショット社。総譜・管弦楽合唱パート譜・終楽章ピアノ版総譜出版

楽器編成 Fl.Ob.Cl.Fg.（第4楽章でコントラ・ファゴットが加わる）。Trp.（第2・第4楽章にはトロンボン3が加わる）。以上各2。Hrn.4.Tim.（第4楽章にはトライアングル、シンバル、太鼓が加わる）。弦5部。ソプラノ、アルト、テノール、バリトン各ソロ。混声合唱

歓喜の歌

ああ、私の友人たちよ、このような調べではないのだ！
私たちをもっと楽しくさせ、
そして喜びにみちた調べを歌おうではないか！
(ベートーヴェン)

喜びよ、あなたは私たちの心をどろどろに熔かし
一つに結び付ける美しい神々の火花だ
あなたは平和の樂園からやってきた乙女だ
天国から来た者よ、
私たちはあなたの喜びに火のように酔って
みんなであなたの神殿に昇るのだ
喜びの魔力は、時の流れが、
戦争や飢餓や疫病で厳しく分けへだてた私たちを
再び友人として一つに結びつける
すべての人々よ、喜びの優しい翼が広がる下で
兄弟になろうではないか

抱き合おう、百万の人たちよ！
この愛の口づけを全世界に贈ろうではないか！

星空の上には
私たちを愛する偉大な父がきっと住んでいるに違いない
なぜなら
あなたは、一人の友の友となる大いなるサイコロの一振りに
きっと成功するだろうからだ
あなたは、きっと一人の優しい女性をかち得るだろうからだ
さあ、みんなでこの喜びの声に唱和しよう
そうとも
この地上でただ一人でも自分のものだと言える人は
大声で唱和しよう
そしてそれができなかった人は
一人泣きながらこの仲間から静かに去っていくがいい

この世のすべての善い人たちも
この世のすべての悪しき人たちも
すべての生き物は
薔薇の花びらが散かれた歓喜の道をたどりながら
自然の乳房に触れて喜びを飲む

歓喜は私たちに甘いキスとブドウ酒だけではなく
死ぬような辛酸をなめた友を
「彼を救え！」と与えてくれる

精神的な歓喜とは異なり
この世の、肉体的で物質的なありとあらゆる快楽は
ウジ虫のような人たちに与えられる

愛の天使ケルビムは
私たちのために、いま、神の前に立っている！
あなたたちはひざまづいているか、百万の友よ？
あなたたちは私たちを生んだ創造主を予感しているか
世界の人々よ？
星の天幕の上に創造主を探し求めよう！
星空のかなたに、彼は住んでいるに違いない

私たちの創造主である太陽が
天のきらびやかな公道を通って
喜びながら宇宙を動くように
兄弟たちよ、進みなさい

あなたの定められた道を、勝利に向かう英雄のように
喜びにみちて、進みなさい

（構成・訳：都築正道）

音楽監督のお話

'95春日井第九の新しさ

—'95春日井第九の意義—

都筑 正道

最初のなぜ 「なぜ、ニューヨークから指揮者とソリストを呼ばうと思ったのですか」とみなさんから良く訊かれます。もちろん、沢山の理由を探し出すことが出来ますが、そのキーワードは、「円高」「戦後50周年」「春日井の国際化」「ホセさん」「21世紀を象徴する新しい第九」「アグレッシブ」といったところでしょうか。

円高景気 まず、円高です。「円高不況」が日本を襲いました。でも、この円高不況を克服するには、円高を積極的に景気回復に利用することです。実行委員会で、「予算さえあれば海外からでも優れた指揮者とソリストを呼びましょう」と決まったのは5月でした。「¥」が80円と最高に高かった。日本では、需要と供給の関係から、指揮者とソリストのギャラは、12月の「第九」公演が一番高いときです。それに、値段が年々エスカレートしていくのが恐い。年末に第九を定期的に開催する者にとって、値上げの後押しをしているようで、少々責任を感じます。当然、指揮者やソリストの質も下がります。円高で予算が合ったのを幸いにこの矛盾から抜け出ることを考えました。それで早速、ニューヨークにいるホセ・コントレーラス (Jose Contreras) さんに電話をしました。

国民の国際的円感覚 彼は、円建て払いやソリストの選任も含めて、すべてに渡って同意してくれました。それからというもの、ご存知の通り、どんどん円安になり、ついには百円を越えてしまいました。8月の第九合唱団の結団式で、「円高のときに、これはとてもいい考えだと思いましたが、いまは大変です」とお話ししたら、どとと会場が湧きました。そのとき私は、とても感激しました。いまのどの世界で、これだけ多くの国民が、自国の通貨が基準通貨のドルに対して高いか安いか知っているでしょうか。それは、日本をおいてはありません。でも、円安でニューヨーカーに迷惑を掛けます。練習のために1週間早く来日するホセさんには、「せめてその間、私の家で泊まって下さい」と愛知県医師会交響楽団の若井一朗先生がゲスト・ハウスを提供して下さいました。

平和50年 今年は戦後50年。日米が闘って多くの犠牲者を出して半世紀が過ぎました。今ではほとんどの人が戦争を知らない世代に属する人たちです。「いや、ぼくは良く知っているよ」と26歳の息子がいました。「湾岸戦争です」。25歳の下の息子はいました。「ボスニア・ヘルツェゴビナ戦争に、受験戦争に、交通戦争に、ケベック州の言語戦争に…」。分かった、分かった。そういえば、人類が産まれてこの方、この地球上に「戦争」がなかった時はなかった。日米だけの問題ではありません。20世紀を生きてきた私たちは飢餓や自然破壊など、未解決の問題を沢山背負ったまま、まだ汚れていない新世紀へ足を踏み入れることになります。きっと、次代の子供たちから告発されることでしょう。とても残念であり、とても悔しい気がします。

新しい第九 今回の第九の最大の目的は、この春日井で「21世紀を象徴する新しい第九」を上演することです。「新しい第九」とは、これまでの「第九」のように、どこにでもある指揮者とソリストとオーケストラをセットで音楽事務所に頼む「パック第九」、地元の演奏家だけで固める「ご当地第九」—もちろん、各々にいいところもあります。でも、私たちには、都市の顔である立派な市民オーケストラ「春日井市交響楽団」があります。花村浩克団長への厚い信望のもと、カポは五周年を迎え、市民の信頼を益々厚くしています。荒川昭代団長を中心にして二百名の合唱団も意欲的です。鶴飼一郎市長を始めとして、春日井市こぞって積極的な支援を惜しまない。これが春日井市が誇る音楽文化の勢いであるならば、もっと「アグレッシブ（極めて意欲的）」な春日井第九があつていい。例えば、「国際的な第九」「新しい人類の理念の実現としての第九」が考えられるとするならば、外国人の演奏家を招いてはどうでしょうか。指揮者はもちろんのこと、ソリスト4人も一緒に招いてはどうでしょうか。「パック第九」にならないように、私たちでオーディションをしてはどうでしょうか……



ホセさん 「それは良いですね」という三浦昌夫実行委員長の笑顔を見ながら、指揮は、ぜひ、ホセさんにお願いしようと思いました。ホセさんは、昨年、中部大学女子短大の小中陽太郎教授の招聘で大学へ講演にやってきたシンシア・コントレーラス (Cynthia Contreras) さんのご主人で、NY市のお隣にあるニュージャージーのパリセイド室内管弦楽団の音楽監督で指揮者です。そのとき飛び入りで、中部大学開学30周年の記念式典で大学のオーケストラを指揮していただきました。ホセさんの容赦ない激しいテンポに負けじと、学生たちはこれまでにないほど一生懸命に『運命』に挑みました。その両者の姿に先生方も感激していました。それもあって、ホセさんの音楽に対する真摯な態度と情熱は既に広く周知のこととなりました。

オーディション そんなホセさんから、「ソリストのオーディションに来ませんか」とお誘いがありました。それで、今年の9月の初め、大学の海外研修でニューヨークへ行く機会をとらえて、オーディションを設定していただきました。オーディションのアレンジは、パリセイド室内オケの理事長ドナルド・ヘフト (Donald Heft) さん。リンカン・センター横のリハーサル室が会場です。さて、オーディションに行って驚きました。さすが「大リーガー」ですね。13人の応募者があり、連続で五時間聴きましたが、凄い剛速球でピュンピュン飛んでいます。夜、お風呂に入ったら身体中あざだらけでした。



コレベティール これほど優れたソリストたちが、これほどたくさん参加して下さるとは思ってもみませんでした。時間が指定してあって、次々にやってきては部屋の外の階段に座って待っています。彼らは、ピアニスト持参でやってきます。ピアニストといても、マネジャーと指揮者と監督を兼ねています。専門用語で、ピアノを弾きながら歌の指導をする彼らを「コレベティール」といいます。私たちへの挨拶ややり込みはむろんのこと、歌手とテンポや歌い方を確認したり、落ち着かせたりなどめたりしています。歌手は、歌う前に彼の注意を聞いて、「ウンウン」と頷いています。腕自慢の本当のマネジャーも付いてきて、私たちの横で自慢そうに見つめています。一人20分の持ち時間で、お得意を1曲か2曲と、ホセさんがその場で指定する第九のパートを歌います。

NYの春日井人気 今回のオーディションの参加者はみなさん大変な経験の持ち主で、オペラやオペレッタやミュージカルまで歌いこなす現役のバリバリ。日本なら、こちらからお願いにあがらなければならぬような、凄い大物歌手たちもどんどんやってきます。この辺りが、さすが自由で実力の国アメリカですね。ホセさんへの信頼が厚いこともありますが、彼らが春日井に大きな魅力を感じていることも事実です。オーディションのあと、歩いて近くのプラザ・ホテルまで行きました。そこで、ホセさんとドナルドさん（彼にもオーディションを聴いてもらいました）と三人で話し合って今回の四人を決めました。美味しいプラザのケーキをドナルドさんにご馳走になりましたが多くの意見が出され、多くの討論がなされました。その多くは、日米の「第九」認識の差であったと思います。

天使と悪魔 日本の「第九」はアンサンブル重視と称して、声の出ないソリストが幅をきかせています。私が、わざと均衡を壊すような個性的な声を選んだのは、「アグレッシブなアメリカの第九」が聴きたかったからです。ソプラノのクララ・ミラー (Clara Miller) さんは大変な美人で、オックスフォード出身の文学修士です。映画のナレーションもつとめ、評論や著作もあります。アルトのジョイス・カンパーナ (Joyce Campana) さんの声は、悪魔的ともいっていいほど、深く、鋭く、挑戦的でした。ホセさんは、もっとマイルドで格調の高いソリストを望んでいました。彼は、新聞の対談で、「私は天使の優しい声の方が好きだったのですが…」これが、選考過程で大いに意見が分かれたところでしたね。『第九』は私たちに大変な努力と大幅な意識改革を要求してきます。音楽監督と指揮者の対立点が鮮明な

ほど、結果的に大きな成果が上がるでしょう」と私に語っています。

NYっ子の第九 正直言って、NYの歌手たちは、自由曲のオペラのアリアなどは格段に素晴らしいのですが、概して「第九」のパートはあまり上手ではありません。「第九」をステージで歌ったことがないのです。もちろんプロですから、来日までにホセさんのレッスンで、立派な「第九ソリスト」に育っています。もちろん心配はありません。どう変わったか、それも楽しみの一つですが、「アメリカのオペラ歌手・ミュージカル歌手がどう第九に挑戦するか」の方が大いに興味があります。これが、今回の大変なテーマでもあるのですから。

少ない第九演奏会 日本では十二月になると全国で二百五十回以上も「第九」が上演されるほど、私たちは、「第九」に対して強い思い入れがありますが、NYではどうやらそんなことはなさそうです。「アメリカでは滅多に第九は上演されません。私もこれまでに、NYで第九が演奏されたのを聴いたことがあります」とホセさんもいっています。ただし、シンシアさんは、「高校時代に合唱団でアルトを歌いました」といいます。また、オーディションの参加者の経歴書にも「第九を歌った経験がある」と書かれていましたから、アメリカでも全くないとはいえないません。



日本の第九観 ホセさんはいいます—「アメリカ人が『第九』を聴いても、日本人ほど想像力を駆り立てられないのは、人類愛の感情が十分に醸成されていないからでしょう。その原因は、長く続いた苛酷な戦争に直接触れた痛恨な体験とその結果にたいする深い悲しみの情が一般的のアメリカ人に欠けているからだと思います。この体験と悲しみが、第九の理想をより高く評価し、平和に生きることがいかに重要であるかに思いをいたすほどに、日本のみなさまをより寛容でより聰明にしたのです。このことを心に留めながら、世界中のいたるところ、この交響曲で新しい年を始めるべきです」

可能にしたもの いつのまにか、長いお話をしまいました。それでは、昨年よりもさらに成長した私たちの春日井市交響楽団と春日井第九合唱団、それに、エネルギーッシュなホセさんの指揮、個性的なNYのソリストによる「新しい第九」をお聴き下さい。市民の総意を反映した「春日井の第九」をお聴き下さい。実行委員会の熱意が可能にした「国際的な第九」をお聴き下さい。

みんなで歌おう、春日井贊歌を…

〈歓喜の歌〉

作詩・なかにし礼

The musical score is in G major and 6/8 time. It features ten staves of music, each with a treble clef and a sharp sign indicating G major. The lyrics are written below each note, with some words having multiple meanings or variations. For example, 'あけ' (ake) can mean 'dawn' or 'open', and 'かわ' (kawa) can mean 'river' or 'wave'. The score is designed for a group of voices, likely a choir.

1. 愛こそ歓喜にみちびく光
さえぎる苦難を越えて進まん
歓喜の頂いただき踏みしめた時
我らは兄弟世界は一つ
歓喜の頂いただき踏みしめた時
我らは兄弟世界は一つ

2. 気高き乙女をかち得たものよ
手をとり歓呼の叫びをあげよ
人間一人で何が出来よう
愛なき孤独の人は立ち去れ
人間一人で何が出来よう
愛なき孤独の人は立ち去れ